書評

高橋裕文『中世東国の村落形成 ―中世前期常陸国を中心に―』

薗部寿樹

本稿は、本年に刊行された高橋裕文氏の論文集『中世東国の村落形成―中世前期常陸国を中心に―』について評するものである。

私が本誌に投稿した論文「中世村落における小領主と宮座―畿内・南九州及び東国の事例から―」（以下、拙論と呼ぶ）を脱稿した直後、高橋氏より本書をご恵与いただいた。

高橋氏が「まえがき」で触れておられる鶴岡八幡宮領武蔵国佐々目郷。私も四〇年ほど前の院生時代、東京都立大学峰岸純夫ゼミのニセ学生として「鶴岡事書日記」を読み、佐々目郷張本百姓たちのめざましい働きに感動した。そして彼らの活動から、東国にも惣村のような組織があったのではないかと強く夢想した覚えがある。

しかし東国は、村落に関する古文書が極端に少ない。私は、史料を読みながら考えを組み立てるタイプの研究者である。史料の絶対的な不足を乗り越え、理論を専ら駆使して歴史像を構築する能力を、残念ながら持ち合わせていない。それで私はまず、史料が豊富な畿内近国の村落から研究を始めた。

それから四〇年ほど経った今日、薩摩国甑島の宮座文書を分析したことで、ようやく東国の村落についても多少言及する勇気が出てきた。それが、拙論なのである。ただこの拙論でも、東国村落に関するオリジナルな史料分析は行っていない。そういう意味で私はいまだに、東国の村落研究に関して初学者のままである。本稿は、そのような私が高橋氏の論文集を読んで得た感想を記したに過ぎない。そのようなスタンスをご理解の上、本稿をお読みいただければ、幸いである。

まずは、東国村落という難問に対して果敢に挑戦された高橋氏に敬意を表したい。

高橋氏が第一章「はじめに」で書かれているように、東国の中世村落の実態に関する研究は皆無に等しい。ただ同氏は言及されていないものの、高牧實氏による相模国篠窪の百姓中座敷に関する研究がある(1)。それによると、篠窪の百姓中座敷は小領主に統率された「おとな百姓」たちだけの宮座であった（これを便宜、「おとな中宮座」と呼ぶ）。これは、畿内近国の臈次成功制宮座とは全く異なるものである。臈次成功制宮座とは、畿内近国の惣村の基盤となるもので、宮座構成員が村の成功勤仕により臈次階梯を登って古老（乙名・年寄衆）となっていく祭祀組織である(2)。東国の宮座、少なくとも相模国篠窪のおとな百姓宮座が畿内近国の臈次成功制宮座とは異なるという点は、あらかじめしっかりと認識しておきたい。

まず、本書の構成と初出年を示しておく。

まえがき
第一章　官務家領常陸国吉田社領における沙汰人・住人の動向―平安・鎌倉期東国の村落形成について―（初出二〇一九年）
第二章　鎌倉期東国における地頭支配と郷村の動向―常陸国真壁郡竹来・亀熊・長岡郷を中心に―（初出二〇一九年）
第三章　中世前期東国の村落構造と村役所の機能―鹿島神宮文書「大賀村検注取帳副日記」の分析を通して―（初出二〇一二年）
第四章　常陸国信太荘の在地支配と惣荘的結合―中世前・後期を通じた荘園的枠組みの存続―（初出二〇一七年）
終　章　中世東国における惣郷＝郷村結合について（新稿）
あとがき

本書における高橋氏の議論は荘郷の伝領関係など多岐に渡るが、本稿では村落関係に絞って論じる。また各章の要約も省略する。

第一章では、吉田郡吉田社領を扱う。吉田社領は沙汰人で殿原（＝地侍身分）の臼根三郎入道が社領全体を代表していた（二四頁）。また「住人百姓等」という史料上の記載から、住人は百姓の上に位置しており郷を代表する存在だと指摘している（二五頁）。そのうえで「惣郷例」を手がかりに、一三世紀中頃には住人・百姓による村落結合が形成し、一四世紀前半には惣郷が吉田社領の郷村連合を意味するようになると指摘している（三六頁）。

高橋氏は「惣郷は郷村連合だ」として、その典拠として小山靖憲氏の論文をあげている(3)。この小山論文は、陸奥国骨寺、伊賀国名張郡、播磨国久富保、中世後期の山城国惣郷など、村落の地域差を無視したキメラ的な論考で、極めて問題が多い。

高橋氏は、この小山論文中の中世後期惣郷の事例を論拠としたようだが、これはもともと山城国の事例である(4)。たんに「惣郷」という「史料用語」の解釈であれば、このような引用に問題はないかもしれない。しかし、ここにおける「惣郷」は明らかに山城国を事例とした「研究用語」である。そこには「畿内近国の惣村を基盤とした村落連合」というニュアンスが明確に込められている。従ってこの「惣郷」という研究用語を他の地域の史料に出てくる「惣郷」という言葉に安易にあてはめて理解することは、極めて危険な行為である。

ところが小山氏自身、この「惣郷」をそのまま常陸国真壁郡の分析に用いている。ここでは、惣郷という言葉の共通性のみが論じられているだけで、その惣郷の内部構造やその基底となっている惣村や郷村の内部構造を小山氏は全く無視している。そして当然のことながら、この研究用語「惣郷」をそのまま常陸国の事例にあてはめて理解しようとする高橋氏の論法も、極めて危険な行為だといえよう。

また「一三世紀中葉には住人・百姓による村落結合が形成した」という高橋氏の指摘についても、問題がある。この章のどこにも、この時期の吉田社領における村落結合の形成を示す史料は挙げられていない。ここで問題なのは、この直前に拙著の議論が援用されている点である(5)。拙著で私は、一三世紀中頃の畿内近国における惣村の形成を論じた。高橋氏は、一三世紀前半の検注帳で名主・百姓の実態が明らかになることを前振りして、拙著の議論を援用する形で一三世紀中葉の村落結合の形成を論じたかのように、文脈上、読めてしまう。私は、この点を危惧している。

いずれにしても、拙著の当該箇所では畿内近国村落に関してのみ議論しているのであって、東国村落については一言も言及していない。したがって拙著の当該箇所は、常陸国における一三世紀中頃の住人・百姓による村落結合形成に関して、どのような論拠も与えるものではない。この点を重ねて明確に確認しておきたい。

第二章は、真壁郡の竹来郷・熊亀郷・長岡郷について論じている。まず四人の平民名主が竹来郷の代表ではないかという興味深い指摘をし

ている。前述した高牧氏による篠窪百姓中座敷の研究を参照すれば、この四人の平民名主そのものが郷の基本的構成員であった可能性が高い。あるいは篠窪のおとな中宮座のように、「四人名主中宮座」のような存在を想定できるかもしれない。いずれにしてもこれは、東国村落の実態に一歩踏み込んだ重要な指摘だと思う。

ついで長岡郷に山野用益権や用水管理権があったことを指摘する。そのうえで、『日本国語大辞典』第八巻「惣」の項目を引用して、長岡郷が「南北朝以降、名主層から選ばれた乙名・年寄を中心とした村落共同体」であったと結論づけている。

しかし、この『日本国語大辞典』「惣」の項目は明らかに畿内近国の惣村に関する記述であり、それをそのまま長岡郷に適用することは当然のことながら、極めて不適切である。このような議論は、歴史学の基礎となる実証とはほど遠い、空論といえよう。

また嘉暦二年（一三二七）鎌倉幕府連署召符案（長岡文書三号）を引用して、百姓皆口弥太郎が古老百姓として村落集団を率いて刈田狼藉をしたと論じている（六六頁）。ところがこの文書は、宛所の「長岡郷一分領主伊予阿闍梨御房」に対して、「百姓皆口弥太郎□□同等」を連れて、裁判の場に出頭して陳述せよと命じた鎌倉幕府の「召符」（召集令状）なのである。

欠字が多くて断定はできないが、事書にある「孫太郎友平・妻平氏（女ヵ）」の土地を刈田狼藉させたのは、「長岡郷一分領主伊予阿闍梨御房」であろう。そして、この伊予阿闍梨御房の命令に従って刈田狼藉をした実行犯が、百姓皆口弥太郎らだと考えられる。刈田狼藉の主体はあくまで伊予阿闍梨御房であり、百姓皆口弥太郎はその命令に従ったに過ぎない。高橋氏は、長岡郷と南小幡郷（下小幡）との境界相論による刈田狼藉だとするが、仮にそうだとしても説明が決定的に欠如している。孫太郎友平・妻平氏女は、南小幡郷の領主なのであろうか。

第三章では、行方郡大賀村を議論している。大賀村は、三人の名主、一〇人のおとな百姓及び百姓、小百姓（散田作人）から構成されている。祭祀組織は三人の名主に独占され、おとな百姓はそれに従属する立場にあった。また祢宜は、おとな百姓から選ばれたと推測している。三人名主におとな百姓が従属させられているという点から、「三人名主中宮座」のような祭祀組織を想定できるかもしれない。いずれにせよ、重要な指摘であろう。

第四章では、信太郡信太荘を扱う。信太荘では木原社と竹来社の二社が惣荘鎮守社であり、その下に上条・下条それぞれ諸郷の寺社供僧寺が祈祷衆となり、その祈祷に土豪が衆徒、おとなが旦那として参列していると指摘する（一四〇～一四一頁）。興味深い指摘だが、その史料的根拠は不明である。

終章では、中世東国における惣郷（＝郷村結合）についてまとめている。東国の惣郷といいながら、美濃国大井荘を南北朝・室町期の惣郷の事例として言及している。東国村落に関して総括する終章で、史料を引用してまで美濃国の事例に言及する意味が私には全く理解できない（一六五～一六七頁）。

また武蔵国佐々目郷の事例をあげて、惣郷の指導者はおとな百姓であるとしている。その一方で、これまで第二章と第三章で取りあげてきた名主については全く言及がない。このことを私は不思議に思う。

高橋氏は、数多くの研究書や論文を援用している。そして、それらに基づく支配関係に関する記述が圧倒的に多い。ところが、それに比べて肝腎の村落や村落構造に関する言及は、質量共に少ない。論文集の表題が「村落の形成」なのに、これでは寂しい限りである

また村落に関する指摘に対して、その史料的根拠や説明が十分に示されていない。この点は、この論文集の最も致命的な欠陥である。

高橋氏は今後、中世後期、中近世移行期と、東国村落の研究を重ねて

いかれるそうである。その折には是非、他地域の村落に関する研究結果を安易に取り込むのではなく、真摯に東国の村落史料と向き合い、そこから得られたオリジナルな情報で議論を積み重ねられるよう、お願いしたい。

注

（1）高牧實『宮座と村落の史的研究』（吉川弘文館、一九八六年、第三部第八章関東における草分百姓の座居と宮座）。なお、拙論もこの宮座について言及した。

（2）薗部『中世村落と名主座の研究―村落内身分の地域分布―』（高志書院、二〇一一年）など。

（3）小山靖憲『中世村落と荘園絵図』（東京大学出版会、一九八七年、第五章初期中世村落の構造と役割、初出一九七〇年）。

（4）前掲注（3）小山著書一七二～一七四頁。

（5）薗部『日本の村と宮座』（高志書院、二〇一〇年、三五頁）。